

2010年度 リーディング・ユニバーシティ募金地域リーダー育成助成金 活動報告書

デザイン工学部建築学科 高村雅彦研究室 島原プロジェクト

a) 活動総括

デザイン工学部建築学科 教授 高村雅彦

【テーマ】

—都市の歴史的本質を探り、まちづくり活動を誘導して、地域の活性化を図る—

【目 標】

長崎県島原市では、過去の雲仙普賢岳の大噴火の影響で、防災都市への転換とともに、平成3年の災害復興では、歴史的都市として新たなまちづくりを計画してきた。しかしながら、その方法は現在も模索中である。そこで、本研究室では、2006年度から建築や都市の歴史の観点から調査を進め、昨年度にはその幅を広げるために「地域リーダー育成」助成金を頂き、都市再生のベースとなる基礎調査を完了した。

そこで今年度、学生がその調査報告を兼ね、島原の地域再生を建築ならではの視点から新しい21世紀の歴史的都市復権を提唱し、地域のリーダーとして活躍することを目指す。

【内容・計画】

昨年度の調査内容の報告会を、島原市役所やまちづくり協議会、住民の方々を集めて行う。ここでは、まず調査地である漁師町・遊郭街・商店街のそれぞれの特徴を述べることで、地元の方に、日本屈指の歴史的価値がある都市であることを、理解していただくことを目的とする。ここでは、昨年調査を行った学生が中心となって発表会を進行することで、主体性を持つと同時に、彼らが島原のまちづくりの礎を作ることとなるため、リーダー的存在となり、まちづくりの先頭を引っ張る人材となることを目的としている。

次に第二段階として、学生が解説を行う3つの地域のまち歩きを企画しており、これは、住民の方が実際に目で確認することで、理解を深めることを目的としている。学生もこのまち歩きでは、普段の生活では問われることのない表現力を存分に発揮しなくてはならず、学生の実力が試される。リーダー的存在となるには、人を惹きつけるこの表現力が極めて重要であると考え、この内容を取り入れた。

さらに、2006年度からの調査をまとめた報告書を現在作成中で、5月上旬に刊行する。この今までのプロセスをまとめるという重要な作業により、深く意義を考えられ、より

意識を高めることが期待される。

今年度では、これら3つの内容を実行し、まちづくりの方向性を学生が主体となっていくことで、行政、市民、大学の三者が一体となった新たな都市再生の実現を最終的には目指す。これらの大学の授業では経験し得ない過程を通じ、学生達の成長は間違いなく自信へと繋がり、将来、どのような場面でもリーダーとしての役割を担うことができる人材に成長していくことになると思う。

【成果報告】

昨年度の成果報告を、お世話になっている市やまちづくり協議会、市民の方々をお招きし、島原で調査報告会を8月に開催した。それにあわせ、昨年度の調査対象地であった漁師町・遊郭街・商店街の3地域を実際に出向き、学生が解説を行うまち歩きを行った。この現地調査には、地元住民、市役所、商工会議所などから15人余りが参加し盛大に行われた。さらには、本研究室で2006年度から続く島原調査の報告書を、7月上旬に刊行し、現地のみならず、関係の研究者からも高い評価を得た。これら3つが当初予定された成果報告であり、いずれも実施することができた。

【達成状況】

8月の島原での成果報告会と、9月の日本建築学会(富山)の発表での客観的評価が、その達成度を測る指標となっていたが、当初の予定通りに実施し目標を達成することができた。とくに、重要であったのは島原での成果報告会であり、専門知識のない住民の方にどの程度理解してもらえたかを伺うことで、その指標を確認することができた。一方、専門的知識が求められる日本建築学会での発表は、他大学の教授などからの質問に対する答弁や発表に対して的確に対応し、内容においても高い評価を得たことから、ほぼ当初の達成指標をクリアできたことを確信している。

b) 学生報告

デザイン工学部建築学科 3年 山口みなみ、奥富小夏

デザイン工学研究科建築学専攻 宮田駿介、中村敏宏

【はじめに】

2010年度における島原プロジェクトの活動は、2009年度の活動の引継ぎを兼ね、2010年8月に調査地である島原にて、2009年度における調査の成果内容を、島原の住民の方々に対して報告会を行いました。2009年度のプロジェクトでは、「島原 歴史都市の復権 ―都市の歴史的本質を探り、まちづくり活動を誘導して、地域の活性化を図る― まちと建築のフィールドワーク編」と題し、地域住民や市民団体・行政の協力を得ながら、漁師町・旧遊廓街・商店街の三つの地区を実測・聞き取り・文献調査などを実施することで、歴史的本質を探り、何を継承すべきかという「まちづくりの土台」を見出すことを主な活動として行いました。2010年度では、次なる段階として、それらの調査内容を住民の方々や市民団体・行政へと報告することにより、島原の歴史的価値を改めて認識していただきます。その上で、まち歩きや交流会を行い、お互いの意見を交換し合いながら、見識を深めることで、互いに協力し合えるリーダーとして、まちづくりの具体的な活動へとつなげていくことを目的としています。

【活動内容】

2009年度の調査内容をまとめるために、まず調査報告書を作成しました。それが報告会の土台となっています。その報告会を行うにあたり、その旨を島原の方々に告知するべく、以前の調査でもお世話になった市民団体の代表者の方に再びご協力いただきました。ただ、報告書の内容を発表するだけでは、住民の方々に充分理解していただけないため、発表内容を住民の方々にも分かりやすいように工夫を加えました。また、発表会に多くの方に参加していただけるよう、広告を作成し、現地での会場の確保や意見交換のための交流会の準備等を双方で協力し合い、報告会の準備を整えました。

現地では、初めに前回の調査にご協力いただいた方々に改めて感謝の挨拶と、事前広告だけでなく報告会参加へ直接お誘いをして回りました。このような行動が、地元住民との信頼を築くにはとても重要だと考えたからです。また、報告会後にはまち歩きも予定していたため、事前にコースの下調べと、島原プロジェクトで行ってきたことの再確認をしました。

そして発表会の内容は、冒頭で高村雅彦先生に、島原の価値や今後の可能性についてお話いただき、続いて学生が、第一部に漁師町、第二部に旧遊廓街、第三部に商店街、という流れで発表を行いました。第一部でとりあげた漁師町・船津地区は、普賢岳の噴火によって形成された土地に広がる漁師町で、噴火後も、人工的な埋め立てをくり返すことによって現在の船津が形成されてきました。その時代の空間の変遷を読み解くこと

で、見えてくる魅力に船津の歴史的価値を見出した内容です。第二部は、旧遊郭街の建築やまちの構成について調査し、当時の賑わいの様子や港町における遊郭街を図面や写真を用いながら復元しました。「遊郭」というあまり表にされない都市空間の1つを、歴史の重要な要素として後世へと伝え、歴史的・建築的に記録し、保存していく必要性があることを目的とした内容です。第三部では、島原といえば「湧水」と言われるほど、島原と湧水は密接に関係しており、それを活用した建築が多くみられます。また、あらゆる環境の変化によって、建築や湧水の意味合いも変える一方、外的環境に左右されずに「水屋敷」として現在でもその姿を残しているものもあります。そうした湧水と建築を、時代の変遷とともに解き明かすことで、その歴史性と現在の商店街の価値を見出した内容をお伝えしました。

そして発表の翌日、調査内容を具体的に体感していただくことを目的として、住民・市民団体・行政の方々と交えてのまち歩きを行いました。まち歩きは発表会での順番に則して行い、この建築の価値はどこにあるのか、この湧水にはどんな意味があるのか、建築の建てられた年代からどんなことが推測されるのか、どのように街が変遷され、空間が使われてきたのかなど、一般の方にもわかるように指し示しながら街を歩きました。それにより、理解を深め、身近にある歴史とその価値を感じて頂くことを目的としました。その際に、事前に用意した経路と、発表時に使用した写真等を記載した冊子を配り、わかりやすさの配慮も加えました。また、その場で自由に質疑応答をすることで、住民の方々だけでなく我々も新たに認識を深めることができたまち歩きとなりました。

まち歩き後に行われた交流会では、それまでの形式を取り払い、学生・住民・市民団体・行政の垣根を越えて、より砕けた雰囲気での意見交換ができるような場を設け、今までの活動をさらに掘り下げることで住民や行政がいかに連動していけるか、今後島原の地域活性における様々な活動の足がかりとなる内容の話し合いなどが行われました。住民主体のまちづくりを行う為には、住民の本音の意見を聞けるこのような交流会の場は必要不可欠のように感じました。

【まとめと今後について】

以上のように、この2年間を通じ、この島原プロジェクトの一連の成果が具体的なまちづくり活動を促し地域の活性化を図る新たなプロジェクトの1つ指標となるような活動をしてきました。本活動報告は、我々による歴史的地区の解明を足がかりとして、広く島原の方々に歴史的価値を理解していただき、今後のまちづくりに活かしていただく活動報告に位置付けられます。こうして、学生自身が調査・研究・報告の中心的役割を担うことにより、自身の成果だけで終わらせず、実際に地域住民の方々と連携して活動を行える地域リーダーとして、今後の活躍が大いに期待できると確信しています。今後は、本年度の報告会を足がかりに、住民主体のまちづくりを促進する一端を担うことが、地域リーダーとしての役割ではないかと考えます。あくまで、第三者としての立場

を崩さず、それを上手く活用し、まちづくりに参加していくことが今後求められると感じています。